

テロワール

—欲望のあいまいな対象としての食と農—

農林水産政策研究所 須田 文明
京都光華女子大学非常勤講師 戸川 律子

1. はじめに

フランス映画の巨匠ブニュエルの遺作の題名を本報告の副題に借用したのは、けっして奇をてらったことではない。食品の地理的表示(GI)について考察するに際して、ますます重要性を増しながらも、テロワールの存在ならびにその検証方法がきわめて曖昧だからである。まさに「テロワールと食品との昨今の連想は、農村および農業へのフランス人の曖昧な関係を示している」[1]。「テロワールの情熱」は、地方と国民国家との、多様性と国民的統一との間のフランスに特有な緊張により培われてきたが、90年代以降、国際舞台においてこの概念が議論的となった。一方でテロワールへの参照は、ユネスコの無形文化遺産へのフランスの美食文化の登録に示されるように、「文化主義的」解釈に委ねられている。他方で、テロワールの存在証明の困難さを見越して、持続的発展の文脈で、「環境主義的」正当化がなされ、さらには、地理的表示をめぐる様々な交渉場面で活用するべく、テロワールを「科学主義的に」正当化しようとする試みも見られる。

2. GI のグリーンングとテロワール

フランスの GI とりわけ AOC (さらに欧州の PDO) においてテロワール観念は不可欠であるが、これは、WTO をはじめとする各種の国際交渉の場で難点を提起する。米国などは GI を市場への参入障壁とし、GI 産品とそのテロワールの結合は単なるマーケティング手法でしかないとするからである。こうした背景において、GI に環境基準を

設定するという提案が、GI に新たな正統性を提供するという主張が登場することになる。

こうしたGIのグリーンングの試みは2000年頃から広汎に見られるようになっていた[2]。長年、「有機ワイン」の表示に反対し続けていたワイン部門でも、チリやオーストラリアなど新興国での品種ワインの登場による競争激化を背景にして、全国原産地呼称生産者連合会 CNAOC のワイン委員会に、「テロワールと環境」調査部会が設置されたことに示されるように、環境側面が強化されるようになっていた。しかし農業省はこうした試みに対して、ことごとく反対の立場をとることになる。それは2006年の農業基本法採択時にとりわけ顕著に表れた。反対理由は、環境的品質がすでに有機農業表示に体现されている、ということであった。もちろん、公的品質表示の複雑さ、わかりにくさが、かねてから全国食品諮問会議 CNA により指摘され、品質表示の厳格なセグメント化が求められていたこともあった。ワイン団体のイニシアチブによる AOC のグリーンングの主張は農業基本法採択時点では失敗に終わった。しかしその後、2007年の大統領選挙によりアリーナが大きく開放され、環境グルネル(2007年7月~10月)が環境保護を選挙キャンペーンの中心におき、環境グルネルの農業部会では生物多様性保護と、農業投入財(窒素肥料、除草剤)の使用削減が争点となり、GIに関しても「2008年以降、任意の形で、AOC産品に環境的規定を統合をすること」が提案された。

こうして、環境や持続的発展のフレーミングがGIに新たな正統性を付与することになるかもしれない。

3. テロワールの科学的証明

他方でテロワールの存在の科学的証明が国際交渉や地理的規則の適用において、ますます厳密に課せられる傾向にある。それは *evidence based* な国際公共政策の実施が求められていることとも関連している。例えば、欧州の地理的表示である PDO 規則にしても、フランスの規則には存在していなかった観念、すなわち地理的環境との結合の証明が要求されることになった。

ところで Teil は、科学技術社会論 STS 研究の観点からテロワール概念の存在論的地位(オントロジー)について興味深い論点を提示している[3]。つまりテロワールは、客観的テストにより管理可能な、モノ chose としての事物なのであろうか。それとも、その生産過程から独立しては分析できない「産品=産出されるもの produits」としての事物なのであろうか。

1) モノ=事物としてのテロワール

一方では農学や土壌学、気象学、栽培学、醸造学などが、ワインの特性の中に、テロワールの効果を見いだすことができるような要因を同定しようとする。他方では官能分析科学が、ワインのテイストの差異を地理的由来(テロワール)へと関連付けようと試みる。ところが、こうした両方向からの科学者の試みは、ことごとく失敗しているようである。農学や醸造学などのアプローチは、ブドウ収穫年のバリエーションの方がテロワールのバリエーションよりも大きく作用することを明らかにしているし、また、官能分析科学についても、偉大なソムリエでさえ、しばしばブラインド・テイスティングにおいて銘柄を当てることに失敗しているように、テイスティングがきわめてパーソナルであるために、テロワールが存在しようがしまいが、これを同定することができない。

2) 産品=事物としてのテロワール

テロワールの科学的存在の有無がどうであれ、生産者やワイン批評家、ワイン商、愛好家たちにとっては、テロワールの存在は自明であり、問題は、テロワールがワインの中でどのように表現さ

れるか、なのであった。彼らにとって重要なのは、テロワールの品質の分析的「真実」ではない。彼らにとっては、B.ラトゥールの「作られつつある科学」と同じ意味で、テロワールは「作られつつある」。つまりテロワールに關与するアクターは予め決められることなく、常にワインを特異化させるために介入し続け、テロワールはモノとして冷却することなく、「熱い」ままなのである。

4. 考察とまとめ

ワインの格付けは定期的に更新され、偉大なワインはいつそう特異化される。これは批評家や生産者、著名な料理人との同盟戦略の結果でもあるし、国際レベルでの新興ブルジョワジーの登場と不可分でもある[4]。Callon はチェンバレンを引いて、事物への愛着を通じた市場的製品の特異化過程について論じ[5]、ネグリらは、こうした特異性を「共(コモン)」と関連づけて論じている[6]。テロワールとはまさに、*regulatory objectivity* を突き抜けた、集合的实践に基づいたコモンにおける異種混交の事物なのである[7],[8]。

参考文献

- [1] Delfosse, C., Lefort, I. “Le terroir, un bel objet géographique”, Delfosse, C. (ed) *La Mode du Terroir et les Produits alimentaires*, Rivage des Xantous 2011
- [2] Ansaloni, M., Fouilleux, E. “Terroir et environnement”, *Politiques et Management publique*, 26(4), 2008, pp.3-24
- [3] Teil, G. “Quand les acteurs se mêlent d’ontologie”, *Revue d’anthropologie des connaissances*, 5(2). 2011
- [4] Karpik, L. *L’Economie des Singularités*, Gallimard, 2007
- [5] Callon, M., et al., “L’économie des qualités”, *Politix*, 13(52), 2000
- [6] ネグリ, A.他『コモンウェルス』、NHK 出版
- [7] 須田文明 「ガイドブックを通じた嗜好的評価の学習とコーディネーション」、『フードシステム研究』18(3), 2011
- [8] 須田文明 「事物と装置—構築主義的社会経済学の宣揚—」、『経済学雑誌』、109(1), 2008